

報告する。

また、この症例を契機として骨シンチグラフィが悪性リンパ腫の診断および病期の決定にいかなる意義を持つのか、過去3年間におこなわれた33症例についても分析・検討した。その結果、Stage IVでは9例中3例に多発性の集積を認めた。またStage IV以外では本症例を含め24例中3例に多発性の集積をみとめた。この3例はその後の骨髄生検により浸潤が認められた。

悪性リンパ腫においてStage IV以外の症例で多発する異常集積を認めた場合は、Stage IVへの進行を示唆する例があり、病期の変更があり得ることを常に念頭において精査につとめなければならない。

8. 骨シンチグラムで hot kidney を呈した症例の検討

浅野 章 吉川 裕幸 (旭川医大・放)

過去3年間に旭川医大放射線科で骨シンチグラムを施行したもののうち、Cisplatin投与後30日以内に骨シンチを施行した17人について、hot kidneyにつき以下の結論を得た。

- (1) 17例中8例(47%)にhot kidneyを認めた。
- (2) 腎機能異常の存在した例では、全例にhot kidneyを認めた。
- (3) 腎機能正常群でhot kidneyとなる例は、すべてCisplatin投与1週間以内にscanされた例であった。
- (4) 腎機能正常でhot kidneyとなる群と、腎機能正常でnormal kidneyである群の間では、Cisplatinの投与量および併用薬剤に明らかな差ではなく、これらの群でのhot kidneyの原因は不明であった。

9. 2核種による癌のマクロオートラジオグラフィー

- 1) ^{99m}Tc MAA(動注法)と $^{201}\text{TlCl}$ (静注法)
- 2) ^{99m}Tc MAA(動注法)と $^{67}\text{Ga citrate}$ (静注法)

一戸 兵部 星 信(重疾研厚生病院・外)

2核種マクロオートラジオグラフィーは、病巣部(癌)の血流状態を知る目的で行われた技術である。 ^{67}Ga , ^{201}Tl を用いて癌を表出し、同時に ^{99m}Tc MAA動注法でMAA粒子黒点分布状態から、癌病巣部血行動態の基本的性質を知ろうとした(MAA粒子は、まだら状、三日月状に、癌病巣部に多く分布する)。摘出標本を厚

さ約1~3mmのスライスにし、サランラップで被い、FUJI RXフィルムにて挟み、増感紙なしカセッテにセット、冷凍庫内で直接接触被曝させ、一部はホルマリン固定し、経時的放射線測定(2核種RIモニター)で、被曝時間の参考とした後、比較のための病理標本とした。 ^{67}Ga , ^{201}Tl は、0.1mRで約36~72時間、 ^{99m}Tc は、24時間(4半減期)要す。術前シンチグラム(^{201}Tl は ^{99m}Tc の前、 ^{67}Ga は ^{99m}Tc の後に)後、手術室内放射線環境測定、術者助手等ポケット線量計で被曝線量測定(5~35mR被曝した)、術後手術室、器具器材の汚染(ほとんど無)を確かめた。被曝線量減少低減が、今後の研究課題の1つである。

10. ^{125}I -fibrinogen 摂取法による下肢深部静脈血栓の検出

高橋 恒男 桂川 茂彦 佐々木康夫
阿部 知博 柳澤 融 (岩手医大・放)

われわれは下肢深部静脈血栓症に対し ^{125}I -fibrinogen摂取率測定法(FUT)を用いて静脈血栓の検出を試み、若干の知見を得たので報告した。

使用装置はガンマカメラ日立 γ -VIEW-HとCIS製If-scan(深部静脈血栓検出装置)で、対象は5例(男3例、女2例、平均55歳)であった。

FUTは甲状腺ブロック後、先に行ったRI静脈イメージを参考にIf-scanのmonitoring ratemeterで血管走行を確認しながら、それに沿って放射能活性を測定し、前胸部に対する下肢各測定部位でのcount比率でもとめた。

その結果、5例中4例で静脈血栓を検出でき、残り1例は骨盤内循環障害に基づく下肢静脈還流不全による上昇例で、静脈血栓は否定できた。このように経的にFUTを行うことより、静脈血栓のみならず血栓症の活動性病変の進展、広がりも明らかにでき、また血栓溶解療法の効果判定に役立つなど、本法は下肢深部静脈血栓症の診断、治療に有用と結論された。

11. ^{99m}Tc アプロチニンによる乳房スキャンの検討

辻 比呂志 伊藤 和夫 (北大・放)
中駄 邦博 (同・核)

乳腺腫瘍の診断を目的としたシンチグラフィーは、こ